

板橋区の両生類・爬虫類

都市においても若干の両生類・爬虫類が生息していることは、詳細な調査が十分行なわれているわけではないが、一般的にも知られている。平地における両生類・爬虫類の分布の退行は水田の消失によって大きく進行し、多くの両生類にとっての繁殖地が失われ、それを捕食する爬虫類が減少する。現在、都市に存続している両生類・爬虫類は、その困難を越えてわずかな林や草地、池などでも生息が可能な種と考えられる。しかしながら、このような種も将来にわたっての生息が保証されているわけではない。本調査では板橋区内の両生類・爬虫類の現況を明らかにし、都市における自然の推移と今後の両生・爬虫類相の変化をとらえる基礎資料を得ることを目的とした。

調査方法

都市においては、徘徊する動物を実際に生息確認することはある程度限界がある。隠れる動物を探索に入れないところが多いので、聞き取りを重視して調査を進めた。公園や社寺、畑地域、河川敷などの比較的自然が残っている地点において、生息個体の探索確認を可能な限り行ない、同時に聞き取り調査を行なった。聞き取りは種名だけでなくその動物の特徴も聞き誤認のないようにした。現地調査は1985年8月5日、10月13日、10月16日、11月5日に行なった。

調査結果および考察

区内22ヶ所の緑地を調査することができた。そのうち6地点において実個体の確認を、12地点において聞き取りによる資料が得られた(表-1)。生息が確認された種はヒキガエル・ウシガエル・カナヘビ・ニホントカゲ・ニホンヤモリ・アオダイショウであり典型的な都市型両生・爬虫類相を示している。

ヒキガエルは安養院の建物脇のトタン板の下から前年生まれと思われる幼体が確認され、また若木三丁目の路上で成体の鱗死体が確認された。その2地点も含めて8地点で聞き取り確認が得られたが、いずれも物陰から出現する成体または亜成体に関するもので、繁殖地についての情報は得られなかった。

ウシガエルは荒川緑地に多く生息しており、グラウンドわきの側溝の水の溜った部分と荒川の川岸に成体、亜成体が見られた。また川岸近くを変態直前の幼生が泳いでおり、川で繁殖が行なわれているものと推察できた。ほかにウシガエルは、赤塚溜池公園で聞き取り確認ができた。

カナヘビは宅地造成の空き地や大宮バイパス予定路際の草地、人家庭、畑際といったところで確認された。一方、公園や社寺ではほとんど確認されなかった。カナヘビは生息する場合にはほとんど見逃すことがないので、そのような環境では生息しないと結論してよいであろう。これは公園や社寺では草刈、落葉掃除が頻繁に行なわれ裸地化して、草地を好むカナヘビの生息環境が消失しているためと考えられる。

ニホントカゲは城北中央公園の周辺斜面において草地に放置されたブロック下の穴巢にいる亜成体が確認できた。ほかに4地点で聞き取り確認が得られたが、公園・寺院・人家の庭と多様であった。ニホントカゲは地中生活が多いので、巢穴が作れる石垣や柔らかい地面が存在するかどうかが生息の可能性に影響すると考えられる。

アオダイショウは実個体の確認は得られなかったが、聞き取りではヒキガエルに次いで多くの地点で生息するとの情報が得られた。公園・社寺の植え込みにとときどき現われるアオダイショウの姿は印象に残るらしく、その点も情報の多い理由かも知れない。アオダイショウは小哺乳類(ネズミなど)や鳥類を捕食し、巢穴を中心に行動することから都市においても公園などで生息が可能なのであろう。とくに幼蛇の餌の点も、樹上の小鳥類の巣を襲う性質から(齊藤隆史氏, 長谷川雅美氏談)、都市においても生息上の問題はそれほどない。

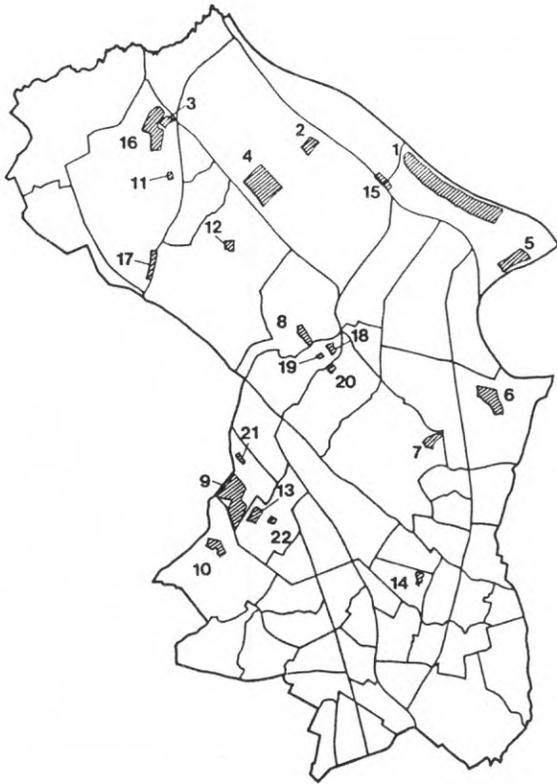


図1. 両生類・爬虫類調査地点—1, 荒川緑地(川原); 2, 高島平徳丸ヶ原公園; 3, 赤塚溜池公園(池); 4, 高島平赤塚公園; 5, 舟渡浮間公園(池); 6, 小豆沢公園; 7, 前野町見次公園(池); 8, 西台公園(池); 9, 桜川城北中央公園; 10, 小茂根茂呂山公園; 11, 赤塚松月院; 12, 徳丸北野神社; 13, 東新町安養院; 14, 双葉町氷川神社; 15, 高島平西台橋(草地); 16, 赤塚城址(畑, 林); 17, 赤塚1丁目(草地); 18, 若木3丁目(畑); 19, 若木3丁目(庭); 20, 中台3丁目(畑); 21, 桜川3丁目(草地); 22, 東新町2丁目(庭).

ニホンヤモリは人家に広範に生息するようである。住宅について情報が得られた6例中5例(4地域)で家に生息するという回答が得られた。しかし今回の調査の方法によってはどのような人家環境の場合に生息するかの判断はできなかった。聞き取りの際に、子供が持っていた、家で捕ったヤモリを見ることができた。その個体の cloacal spur の数は3対で、ニホンヤモリの標準的特徴を示していた。

以上の6種が、現在板橋区内に確実に生息する両生類・爬虫類であるが、そのほかにも若干の情報が得られたので紹介しておく。若木町ではアマガエルを見ることがあるようである。これは2件の聞き取りが得られ、人家の庭の樹上で鳴き声がしたというものと、用水路近くで捕えたというものである。いずれもその個体に限られた目撃例であり、いないとする聞き取りも多く、また現地調査の同所の探索においては確認できなかったことから、アマガエルが繁殖を行なうなどして通常の生息状況にあるとは考えられない。アマガエルが都内で放されたと思われる例も知られており(竹中, 1985)、若木町の例も人為分布の可能性がかなり高い。荒川緑地ではニホンアカガエルが目撃されている。これはカエルをよく知る同緑地の管理人の話で、久しく見ることのなかったニホンアカガエルを本年に1個体だけ見たということであった。しかしながら現地調査においてニホンアカガエルを確認することはなく、その個体は人為分布かあるいは川から漂着したものと判断される。そのほかに見次公園の池にカメが生息するようである。これは目撃談からミシシippia カミミガメかクサガメと思われる。アカミミガメの子である“ミドリガメ”をよくそこへ放しに来ることから、少なくともアカミミガメは生息するものと考えられる。

かつて東京都区内にも水田が多数見られた頃には東日本の平地産の両生類はすべて生息していた。都区内の両生類のかつての分布記録の主なものを表-2に示す。現在の板橋区地名はないが、おそらく当時の板橋の両生類相も表-2にある7種が普通に生息していたと考えられる。イモリは本調査の聞き取りにおいて、赤塚溜池公園に続く川に赤塚地区の団地ができる以前には生息していたということであった。イモリはきれ

表 1. 両生類・爬虫類確認地点 — ○, 聞き取り生息確認 ●, 現地調査生息確認; ◎, 聞き取り・現地調査生息確認; ×, 聞き取り不生息; —, 資料得られず

| 調査地点 | 環 境 | ヒ キ ガ エ ル | ウ シ ガ エ ル | カ ナ ヘ ビ | ニ ホ ン ト カ ゲ | ニ ホ ン ヤ モ リ | ア オ ダ イ シ ョ ウ | 備 考 |
|-----------|---------|-----------------------|-----------------------|------------------|----------------------------|----------------------------|---------------------------------|------------------------|
| 1 荒川緑地 | 公園(川原) | × | ◎ | × | × | — | — | *ニホンアカガエルの 目撃聞き取りあり |
| 2 徳丸ヶ原公園 | 公園 | — | — | — | — | — | — | |
| 3 赤塚溜池公園 | 公園(池) | × | ○ | × | × | × | ○ | *カメの目撃聞き取り あり |
| 4 赤塚公園 | 公園 | ○ | — | — | — | ○ | — | |
| 5 浮間公園 | 公園(池) | — | — | — | — | — | — | |
| 6 小豆沢公園 | 公園 | — | — | — | — | — | — | |
| 7 見次公園 | 公園(池) | ○ | — | × | ○ | × | × | |
| 8 西台公園 | 公園(池) | × | — | — | — | — | — | |
| 9 城北中央公園 | 公園 | ○ | — | ○ | ● | × | ○ | |
| 10 茂呂山公園 | 公園 | — | — | — | — | — | — | |
| 11 松月院 | 寺院 | — | — | × | × | × | ○ | |
| 12 北野神社 | 神社 | — | — | — | — | — | — | |
| 13 安養院 | 寺院 | ◎ | — | × | ○ | ○ | — | |
| 14 水川神社 | 神社 | ○ | — | — | — | — | ○ | |
| 15 西台橋 | 草地 | — | — | — | — | — | — | |
| 16 赤塚城址 | 畑, 林 | ○ | — | ○ | ○ | ○ | × | |
| 17 赤塚一丁目 | バイパス際草地 | — | — | ● | — | — | — | |
| 18 若木三丁目 | 畑 | ◎ | — | ◎ | × | ◎ | ○ | *ニホンアマガエルの 目撃聞き取りあり |
| 19 若木三丁目 | 庭 | × | × | ○ | ○ | — | ○ | |
| 20 中台 | 畑 | — | — | — | — | — | — | |
| 21 桜川三丁目 | 空き地草地 | — | — | ● | — | — | — | |
| 22 東新町二丁目 | 庭 | ○ | — | — | — | — | ○ | |

いな水域において繁殖し、その退行は比較的早いと考えられている種である(浅島, 1982)。普通に生息していた両生類のうち、イモリはきれいな水域が、ニホンアカガエルは湿地水田が、シュレーゲルアオガエルは土畦の水田が、ツチガエルは水田用水路や貯水池が、そしてアマガエルとトウキョウダルマガエルは水田そのものが消失することにより、その生息数を減じていったと思われる(三島他, 1978)。板橋区ではそれは1937年頃から顕著になった水田の減少期に(板橋区, 1969)進行したと考えられる。そして徳丸・赤塚地区のニュータウン建設の頃に現在の両生類相の状態に近くなったのではないであろうか。ところで最近環境庁が行なった「身近な生きもの調査」のアンケート結果の中に4ヶ所イモリの記録がある(環境庁, 1985)。浮間・中台・常盤台・大山であるが、浮間は放されたイモリの目撃の可能性のあるものの、ほかは住宅街であることからニホンヤモリを誤報したものと思われる。

爬虫類も1928年の文献によると、武蔵大学付近(練馬区)においてニホンヤモリ・ニホントカゲ・カナヘビ・ヤマカガシ・ヒバカリ・アオダイショウ・シマヘビ・ジムグリ・シロマダラ・マムシが記録されている(Okada, 1928)。筆者(未発表)も1960年代に新宿区においてニホンヤモリ・ニホントカゲ・カナヘビ・ヒバカリ・アオダイショウ・シマヘビ・シロマダラをみている。本調査の聞き取りからも、以前は赤塚城跡付近にヤマカガシ・アオダイショウ・シマヘビ・ジムグリ・マムシといったヘビ類が生息し、また浮間でも河川改修以前にはシマヘビが見られたといった話が聞かれた。おそらく本州産の爬虫類は板橋区にもすべて生息していたであろう。爬虫類の場合は、繁殖地の問題で減少するとは考えられず、むしろ餌となる動物の減少によって間接的に生息が困難になるようである。その点ではカエル類を餌動物として必要とするヘビ類(特に幼蛇時代に必要とする種)は両生類の減少に続いて姿を消していったと考えられる。トカゲ類(ヤ

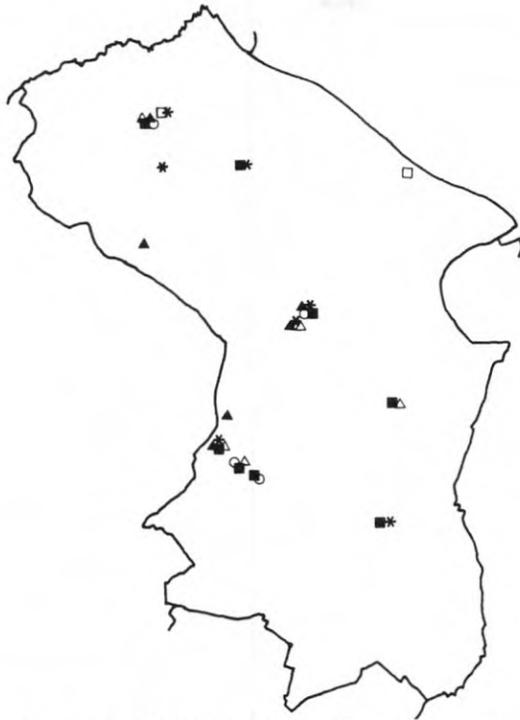


図 2. 両生類・爬虫類生息確認地点—■, ヒキガエル; □, ウシガエル; ▲, カナヘビ; △, ニホントカゲ; ○, ニホンヤモリ; *, アオダイシヨウ.

モリも含む)を捕食するシロマダラはあるいはまだ板橋区内に生息しているかもしれない。

今回の調査で確認された6種の両生類・爬虫類のうち、今後さらに減少する可能性のあるのは、ヒキガエルと2種のトカゲ類(カナヘビとニホントカゲ)であろう。ヒキガエルは成体の生息環境の点では問題はないが、繁殖地の推移によっては減少の危険がある。ヒキガエルは繁殖のために長距離を移動し、1ヶ所の繁殖地が広範囲の個体群を維持していることもあり得る。今回は繁殖地が確認できなかったが、区外へ繁殖に出て行く可能性も含めてさらに調査が必要であろう。カナヘビとニホントカゲは地表の状況によって生息が影響されるので、たとえば林などの緑地があっても生息できないことがある。本調査の両種(とくにカナヘビ)の確認地の状況は、むしろ管理が行き届かない緑地部分が生息適地となっている。今後の残存草地の管理の推移によっては、公園緑地はあってもこれらのトカゲ類は区内から消失しているという状況は起こり得る。

都市において生き残っている両生類・爬虫類

表 2. 東京都区部における過去の両生類の分布記録

| 種 名 | 地 名 | 記 録 年 | 文 献 |
|-------------|------------------|------------------|-------------|
| イモリ | 石神井公園 | — | Okada, 1929 |
| | 石神井公園 | — | 佐藤, 1943 |
| | 石神井公園 | — | 中島, 1937 |
| ヒキガエル | 白金, 赤羽, 杉並, 中野 | 1925, 1938 | Okada, 1938 |
| | 練馬 | — | Okada, 1929 |
| シュレーゲルアオガエル | 代々木 | 1926 | Okada, 1928 |
| | 石神井 | — | Okada, 1929 |
| | 小石川, 白金, 落合, 代々木 | 1923 | Okada, 1931 |
| | 初台, 代々木, 赤羽, 目黒 | 1927, 1928, 1933 | Okada, 1938 |
| アマガエル | 練馬 | — | Okada, 1929 |
| | 目黒, 赤羽 | — | Okada, 1931 |
| ニホンアカガエル | 練馬 | — | Okada, 1929 |
| | 目黒 | 1922 | Okada, 1931 |
| | 荻窪, 下井草, 赤羽, 西ヶ原 | 1924, 1926, 1932 | Okada, 1938 |
| | 杉並 大塚 | 1933 1952 | 品田, 1974 |
| トウキョウダルマガエル | 練馬 | — | Okada, 1929 |
| | 西ヶ原, 中野 | 1932, 1952 | Okada, 1938 |
| ツチガエル | 練馬 | — | Okada, 1929 |
| | 西ヶ原 | 1925 | Okada, 1938 |

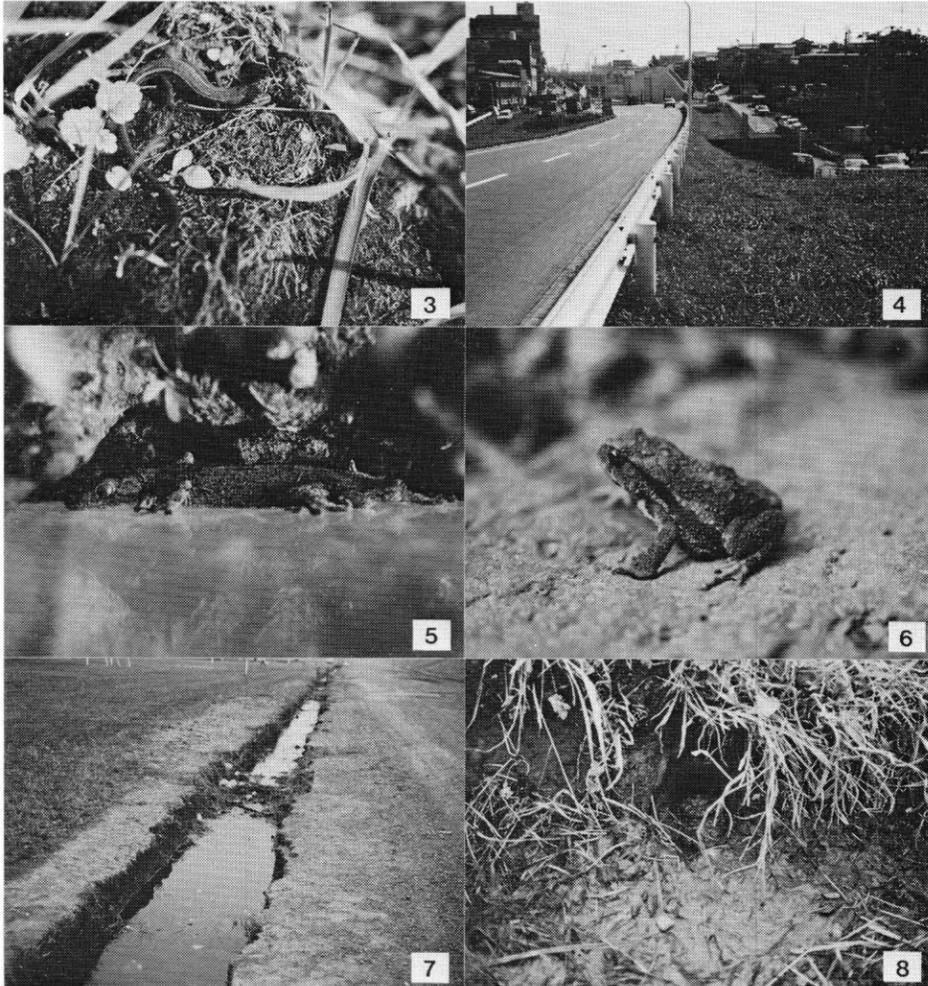


図3-8. 両生類・爬虫類とその生息環境— 3, カナヘビ (大宮バイパス予定線付近); 4, カナヘビ生息環境 (大宮バイパス予定線付近); 5, ニホンヤモリ (若木町); 6, ヒキガエル幼体 (安養院); 7, ウシガエルの生息環境 (荒川河川敷); 8, ウシガエルの穴 (荒川河川敷).

は、単純になった生態系の中で地表付近の重要な高次捕食者としての役割を担っている。そして一見してより豊かな都市の自然が残っている所では、少ないとはいえ、より多くの両生類・爬虫類が生息しているようである。都会の両生類・爬虫類はハエ、ゴキブリ、ネズミといった動物の天敵でもあり、気味が悪いといった偏見さえ取り除けば、人間にとって有益な動物である。今後これらの都会にかろうじて生息している両生類・爬虫類の生息状況に注意しておくことは決して意味のないことではないであろう。

引用文献

- 浅島 誠, 1982, 指標生物の一考察. 横浜市立大学総合研究, 1: 173-187.
 Okada, Y., 1928, Notes on the breeding habits of *Rhacophorus* in Japan. *Annot. Zool. Jap.*, 11: 279-285.
 ———— 1929. Amphibians and reptiles from the vicinity of the Musashi College. *Fauna Musashinensis*, 1. 43-52.
 ———— 1931. The tailless batrachians of the Japanese empire. *Imperial Agricultural Experiment Station*.
 ———— 1936. Studies on the lizards of Japan, Contribution 2. Gekkonidae. *Sci. Rep. Tokyo Bunrika Univ. B*, 42: 233-289.

- 1938. The oecological studies of the frogs with special reference to their feeding habits. *J. Imperial Agricultural Experiment Station*, 3: 279-350.
- 環境庁編, 1985. 5万分の1生きもの地図(東京西北部).
- 佐藤井岐雄, 1943. 日本産有尾類総説, 第一書房.
- 品田 穰, 1974. 都市の自然史, 中公新書.
- 柴田保彦, 1983. 日本の“ヤモリ”は2種類. *Nature Study*, 29: 27-29.
- 竹中 踐, 1985. 両生類・爬虫類調査. 旧芝離宮恩賜庭園環境調査報告書, 3: 15-20.
- 東京都板橋区, 1969. 板橋のあゆみ. 1410 pp.
- 中島雅男, 1937. キモリの斑紋の一観察(予報). 博物学雑誌, 35: 131-136.
- 三島次郎ほか, 1979. 両生・爬虫類調査(多摩川流域における陸上動物の生態学的研究). 多摩川流域環境調査報告書, 3: 265-272.

(筑波大学生物科学 竹中 踐)